

豪雪の被害56億円

助成措置など中央へ要望

一月初めから本県全域にわたる降雪が続き、特に阿蘇、上益城、八代、球磨及び若北地方の山間地での積雪は三層にも及び孤立部落が絶出するなど、県下各地で甚大な被害をこうむった。

県では一月二十四日十八時に雪害対策本部を設置するとともに、特に積雪の著るしい球磨、八代、上益城及び阿蘇地方には調査班を派遣し、また市町村と一体となって、総力をあげて道路の除雪作業を推進する一方、食糧の欠乏した二カ所の孤立地区に対しては、自衛隊の派遣を要請して、ヘリコプターによる食糧の救援を行なった。

然し、八十年來と云われる豪雪のため、大きな被害を受けたが、雪がとければ、調査が進むにつれて被害額は増加する見込みである。

その被災者数二、七〇六戸
被害総額 五五億九、四一八
万八千円

(内訳) 雪害応急対策に要した経費(除雪経費その他) 四、四四四万二千円
農林関係 三五億六、四七三万八千円
水産関係 七億三、九一四万二千円
商工関係 十億円
鉱山関係 六百五十万五千円
路面補修に要する経費 一億五、八四七万一千円
その他 二、〇八九万円

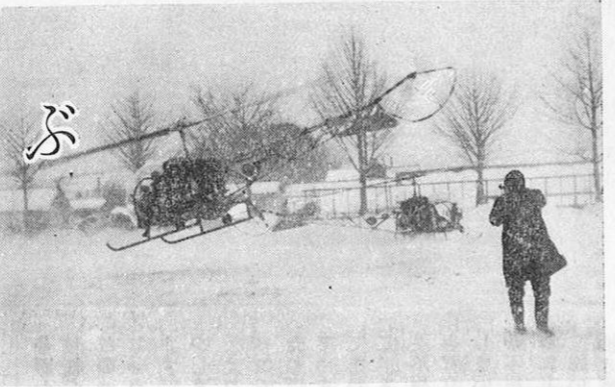
県は、災害の早急な復旧をはかるため、総力をあげてこれにあたるが、さらに、数項目にわたる事項について、衆参両院をはじめ、関係各省に對して要望した。

- 主要要望事項
- (1) 天災融資法に基づく適用政令を速やかに発動願いたい。
 - (2) 農作物の病湿害及び樹勢回復等対策のため、機械資材及び肥料農薬を購入する経費について、助成の措置を講じてもらいたい。
 - (3) 自作農維持創設資金のうちから、新年度早々資金枠(六千万円)の配分を願いたい。
 - (4) その他
 - イ、流通飼料の値上り防止と需給の安定のため、増産産専管産の放出を願いたい。
 - ロ、製炭業者の炭焼窯の再築又は補修に要する経費について、特別の助成を願いたい。
- ハ、昭和三十七年度の公共事業

特別レポート

救援機雪に飛ぶ

佐々木喜久夫
〈熊本営林局情報室〉



南の国九州は、八十
年ぶりと云う未曾有の
豪雪に見舞われつつあ
った。

一月二十三日の午前
十時ごろ、二層の積雪
に閉ざされ、完全に孤
立した矢部営林署大官
山事業所(上益城郡清
和村、海拔七〇〇、
一、二〇〇米)から、不
思議にも雪害からまぬ
がれた一基の公衆電話
からのけたたましいベ
ルが鳴りひびいた。

ミカンの皮が
野菜がわり

「現在の積雪は二層。
昨年一カ月分として
持ち込んだ米も、あ
と二、三日分となっ
た。各世帯への配給
はできるだけ切りつ
め、精一杯の食いの
ばしを図ってはいる
が……」

「今、みんなが一番
欲しがっているのは
米と野菜だ。昨年末
から青ものを食べて
いないせいで、みん
なヘトヘトに疲れ、
子供たちはミカンの
皮まで食べている。」
「救急薬品もすでに
底をつき、病人全で
まわることならなく
お手あげの状態だ。
緊急救援のむ。」
電話をとおして絶

★なお、山間地域のなだれの
起る危険性のある市町村、住
民の方はこれに對する警告、
避難等、災害の防止に十分注
意されるよう望みます。
(防災消防課)

写真左・雪を排除しながら
進む救援隊。左下・山の土
橋の上も雪がこもり、
(以上八代郡泉村) 右下・
甘夏みかんの枝も雪の重み
でボッキリ(若北郡田浦町)



叫ぶ声は、心身ともにその悲
痛さがにじみでていた。
この報に接した矢部営林署は
もちろん、地元警察、県警、県
広報課および防災課、営林局と
の合同緊急会議を県広報課に召
集した。

その結果熊本営林局長名をも
って県知事経由のうえ、陸上自
衛隊西部方面航空隊に對して、
主食、野菜、医薬品等七百三十
五kgの空中輸送方を要請した。

航空隊はひびくした現地の
状況から、ヘリコプター又は飛
行機で空輸することを快諾さ
れ、その基地も熊本および矢部
営林高校の校庭をヘリポートと
することに決定。

早速、二十四日の午前十時と
午後二時の二回にわたってL19
偵察機を飛ばした。

しかし荒れ狂う吹雪と気流の
悪化で、ついに飛行は中止せざ
るを得なかった。

がんばる
西部方面航空隊

あけて二十五日午前八時三十
分、再び偵察機が熊本基地を飛
び立ったが、これまた猛吹雪に
はばまれ、大官山のてまえ三層
の地点までしか進めず、
山本矢部営林署長の指揮する
完全装備の職員や、矢部町民
が待つ矢部農高の校庭に「残念
ながら天候不良のため進入不
能、引き返す」という通信筒を
投下、一同をガッカリさせた。
偵察機の消え行く姿をうらめ
しく見送る間もなく、爆音と
ともに救援のヘリコプター三機が

特設ヘリポートに雪をけちらし
てまい降りた。
人々はワツと湧き立った。
雪はまだ降っている。だが裕
余はできない。ただちに空輸準
備を開始。

一番機の隊長機に野菜、薬品
など三十kgをくりつけた。九
時三十分、数百の町民の拍手に
送られ、雪けむりをけたてて舞
いあがった。二番機も飛んだ。
つづいて三番機も……

喜びにふるえて
「アリガトウ」

十時三十分、現地から投下成
功を伝えてきた。「ありがとう
どうもありがとうございまし
た。」その声は喜びにふるえてい
る。「地獄で仏とはこのことで
しようか、子供たちとは、どんな
にとめても雪の中にとびだし、
婦人たちはヘリをおがんで泣き
ました。いただいた救援品はだ
いじに使います。」

「健康管理をたのむぞ」と
応対する山本署長の声もはずみ
かたわらで聞いていた田中三
佐らも「実にむつかしい飛行だ
が、あんなに喜んでもらえたら
……」と感激の表情。

この成功を伝え聞いた町民に
も、安堵のよめきが湧きおこ
った。

午前十一時三十分、天候はヘ
リが熊本基地にさえ帰ること
ができないうちに悪化。
だがへりは、とにかくそれま
でに六往復、計二百五十kgの物
資投下に成功したのだ。
翌二十六日午前八時三十分、

気流は悪いが空輸開始。のべ
十一機という強行で、ついに予
定残量の四百七十五kgを投下完
了。ときに十時二十分、万才万
才、全員涙して喜びあつた。

地上救援隊
二十五日ぶりに再会

空輸によって、食糧の方は一
応二月五、六日ごろまでは大丈
夫という見通しはついたもの
の、一刻も早く地上の開通をし
なくては、矢部営林署員、地
元消防団員、地元民を含む約百
二十名からなる地上救援隊も二
十五日浜町を出発した。

積雪と降りしきる吹雪とたた
かいながら除雪作業を行ない、
二十六日清和村赤木に到着。二
十七日は一日がかりで、ようや
く四時先の舞岳にたどりつくこ
とができた。

翌二十八日は、七時うえの大
官山めざし、隊員一人一人が食
糧や薬品を肩にかついで懸命に
前進を続けた。

十一時三十分大官山より三・
五時下の地点までおりてきつ
つあった六名の職員と、山本矢部
営林署長ら十三名とが、ついに
二十五日ぶりの再会。

みんな涙で顔をくしゃくしゃ
にして雪の中で抱き合った。
さらに、雪で道の見えなくな
った絶壁の上を一步一歩たしか
めて進み、救援をはじめてから
約八十時間後の午後十二時十分
事業所の全家族を迎えられ、と
もに声にはならない、ゆがんだ
顔を見合せて感激の握手を交
わした。